



Hなママと何度でも

学校で虐められてたのを切っ掛けに二十歳をこえても未だに家で引きこもりをしている僕。

そんな僕を女手一つで育ててくれたママ。

片親の寂しさも感じさせないぐらい僕に愛情を注いでくれた。

……そんなママを僕は自分の感情のままに押し倒し犯した。



今の僕の現状もそれを許しているママも何もかも気に入らなかった

自分が今のようになったのも全てただ甘やかすだけ甘やかしてきたママのせいだと。

そして言いがかりに等しいそれをぶつけ実の母を犯してしまったのだ。



ママは荒い呼吸で胸を上下に動かし、その膣口からはゴポリと精液が溢れ出る。
その惨状に自分がしてしまったことを嫌でも自覚させられる。



「はあ…はあ…ぼく、ちゃん」

ママの自分を呼ぶ声に事の重大さに怖くなり
僕は自分の部屋へと逃げ出してしまった。



「……ほら、僕ちゃん起きなさい。もう、いつまでも寝てたらお昼になっちゃうわよ」

まるで昨日のことがなかったかのように接し、いつもど通りの笑顔で僕を起に来てくれたママ。



もしかしたら昨日のことは夢だったのではと都合のいいことを考えてしまいが、汗や汁で汚れてしまった昨日のままの自分の服がアレは現実だったと教えてくれる。



「マ、ママ何で…っ」

「何でそんな普通にされてられるんだよ！」

僕はママにあんなひどいことしたのに！」

僕はママに当り散らすように叫ぶがママはそんな僕を優しく抱きしめてくれる。



「……そっか。昨日の事、気にしてずっとお部屋にこもってたのね」

「別にいいのよ♥それで僕ちゃんの気が済むのならママがなんだって受け入れてあげる♥」

「ほら、いらっしやい僕ちゃん♥ママが慰めてあげる♥」





「ん、ちゅ、ちゅる♥ちゅぶ♥」

「ママのおっぱい美味しい? 必死に吸い付いてきて
甘えん坊さんなんだから♥」

ぞく♥
ぞく♥

むじゅ♥

ちゅぶ♥

じゅ♥

はぁ
はぁ♥



「あんっ♡乳首そんなに舌でコロコロしちゃだめえ♡」

「んく、ちゅ、れろ♡ママのおっぱい好きっ。柔らかくて気持ちいい……っ」

ぞく♡
ぞく♡

むじゅ♡

ちゃが♡

じゅ♡

はぁ♡
はぁ♡



「あーっ♡ママのおっぱい吸って興奮しちゃった？
僕ちゃんのおちんちんすっごい力チ力チになっちゃ
ってるよ♡ふふ♡ママがシヨシコしてあげるね♡」

はぁはぁ♡

ぞくぞく♡

むじゅ♡

じゅわ♡

ちゃが♡



「…っ♡ ああ…っ♡」

「ジコジコ♪ジコジコ♪がんばってらっばい♪
ビュっ♡ようね♡」

ジコジコ♡



(ママのおっぱい吸いながら甘やかされて…っ)
(や、やばい…っ！これ気持ちよすぎて頭とろけ
そう…っ♡)

シコシコ♡

むじゅ♡

ちゃが♡

じゅわ♡

ぞく♡
ぞく♡

はぁ♡
はぁ♡



「先っぽからお汁が出てきてヌルヌルしてきた♡
ママの手で気持ちよくなってくれたんだ♡」

「あ、ああ…っ♡ままあ♡」

ぞく♡
ぞく♡

シコシコ♡

むじゅ♡

ちゃぷ♡

じゅわ♡

はぁ♡
はぁ♡



「僕ちゃんのお汁でママの手ニユルニユルになっちゃったよ♡」

「んっ♡すごい硬い♡何だかママもドキドキしてきちゃった♡」

シコシコ♡

ぞく♡
ぞく♡

むじゅ♡

ちゃぶ♡

じゅわ♡

はぁ♡
はぁ♡



「あはっ♡手の中でおちんちんがビクビクするの
伝わってくる♡こんなにあっついのが入れられ
たママどっになっちゃうんだらう♡」

シコシコ♡

ぞく♡
ぞく♡

むじゅ♡

じゅわ♡

ちゃが♡

はぁ♡
はぁ♡



「ああ…っ♥ママ、僕、もう出ちゃう」

「いいよ♥ママの手で「ム」して出してちゃって」

ぞくぞく♥

シコシコ♥

むじゅ♥

じゅ♥

ちゃ♥

はぁはぁ♥



びゅるっ♡
びゅー♡

ビュルル〜♡

「わっ♡すっ♡いっ♡いっ♡ぱい出る♡あっ♡ついのがママ
の手の中から溢れちゃったあ♡」

ぞく♡
ぞく♡

むじゅ♡

ちゃぶ♡

じゅわ♡

はぁ♡
はぁ♡



「べとべとのおちんちんママのお口で綺麗にしてあげるね♥」

「ああ、ママ……♡」

いったばかりのチンコにママの舌が淫猥に
纏わりつき出したばかりだというのに先程
よりも硬くそそり勃ってしまう。





はあはあ♡

ぴんちゅ

ちゅ

「んっ、ちゅぶ、れるっ…っ♡んちゅ♡じゅぶ♡
じゅるるっ♡」

「んぶ♡僕ちゃんのおちんちんおいしい♡」



ママが自分から僕のモノを咥えてる姿にゾクゾクとしたものが背筋に走る。

本来ならあってはいけない光景のはずなのに…。いや…だからこそ僕はこんなに興奮しているのだろう。



「ちゅぱっ♡じゅぷっ、ちゅぶ、じゅる♡あむっ♡
ちゅっ♡じゅるる♡」
「おちんちんお掃除しているのにどんどんお汁
が出てくる♡ママで感じてくれてるんだ♡」

はあはあ♡

じゅっ♡

ちゅっ♡



「だ、だってママの口気持ちよすぎて…っ」

「ふふ♡うれしい♡それじゃあママがもっとしてあげるね♡」

はぁ
はぁ♡

じゅっ♡

ちゅっ♡



「んちゅっ、ちゅぶっ、じゅる♥じゅぶっ…じゅる♥
じゅるっ♥んっ♥ちゅる…ちゅぶっ…じゅる♥

はみはみ♡

じゅっ♡

ちゅっ♡



はあはあ♡
「んぐじゅぽ♡じゅぶ♡じゅる♡じゅるる♡」

「あぁっ♡そんなに強く吸われたら…っ」

まるで搾り取ろうとするかのようなママの吸い付きの激しさに気持ちよすぎて腰が抜けそうになる。



はあはあ♡

じゅ♡

ちゅ♡

「あ♡口の中でピクピクしてきたあ♡もう出ちやいそうなの?」

「うん♡めんママ、僕もう…っ♡」

「んふ♡いいよ♪ママのお口に僕ちゃんのプリプリ精子いっぱい出してえ♡」



「あ、ああっ……っ！でる、でちゃっ……っ」

「んっ♡じゅぶっ、んくっお♡んぐ、く♡」

「……凄おい♡僕ちゃんの精液でママの顔ドロドロになっちゃったあ♡」



「ああ♥入っちゃったあ♥僕ちゃんがママの中に
戻って来てる♥ああ♥ああ♥気持ちいい♥
僕ちゃんはどう？ママの中気持ちいい？」

「うん、ママの中あったかくて気持ちいい♥」

ああ♥

ああ♥

はぁはぁ♥

ぐいぐい...

ぐいぐい...

ずん♥

ずん♥

膣肉が逃がさないとかばかりに絡み付いて来る。
あまりの気持ちよさに出し入れする度に腰が
抜けそうになる。

こんな快楽を覚えてしまったら、もう自分で処理
することなんて出来なくなってしまう。



「ふふ♥凄い気持ちよさそう♥したくなったら
いつでもママがしてあげるからね♥」

「う、うん」

顔に出てしまっていたのだろうか。

まるで心を読まれたかのようなタイミングの
良さにドキリとしてしまう。

はぁはぁはぁはぁ

あぁっ♥

ずっ♥

ずっ♥



別の生き物のように絡みつくママの膣内。
気を抜くと一気にイッてしまいそうになるのを
我慢し、僕は負けじと必死に腰を振りチンコを
押し付ける。





「ひうつ♡あつ♡奥に来てる♡コッコッって叩か
れてる♡あんつもっといっぱい突いてえ♡ママの
中で気持ちよくなつてえ♡」

あぁ♡

あぁ♡

はぁ♡はぁ♡

ぐいっ♡

ぐいっ♡

ズッ

ズッ

「僕のチンコで感じてくれてるママの顔可愛いよ」

「だって♡だってホントは欲しかったの♡だから
もっと♡もっと♡ママと一緒に気持ちよくなつ
て♡」





ああ♡

はぁ♡はぁ♡

ああ♡

「僕ちゃんのおちんちんママの中で擦れて…♡
ひゃうっ♡子宮が喜んじやって降りて来ちゃった♡
だしてえ♡ママの中に出して一緒にイこう♡」

「ママっ…中につっ…ママの子宮に中出しするよー」

「うん、出して♪僕ちゃん精液でママの子宮いっぱいにしてえ♥」



びゅるるるるっ♡

「あああ♡中に出てるのお♡精液子宮にびちゃ
びちゃって掛けられてイクの止まらないっ♡」



ママと結ばれたあの日以降、僕はタガが外れた
かのようにママとの淫れた日々を送っていた。
僕は後ろから抱き着くと服の中に手を入れ
ママの大きな胸を堪能する。





「あん♡僕ちゃん急に抱き着いたら危ないわよ♡」

「♡♡♡♡♡」

「ひうっ♡そんなに必死に求められたらママ
感じちゃうよ♡」

吸い付くような柔らかな胸を揉みしだき、発情した動物のように勃起したチンコをママのお尻に擦り付ける。

『もう、そんなにがつつかなくてもママならいつでも受け入れてあげるのに♪』

『ほら、いらっしやい♥ママとラブラブ交尾しましょうね♥』



「ひう♡きたあ♡おちんちんズブズブ入ってくる♡
僕ちゃんのおちんちん中に戻ってくるだけでママ
嬉しくて濡れちゃう♡」

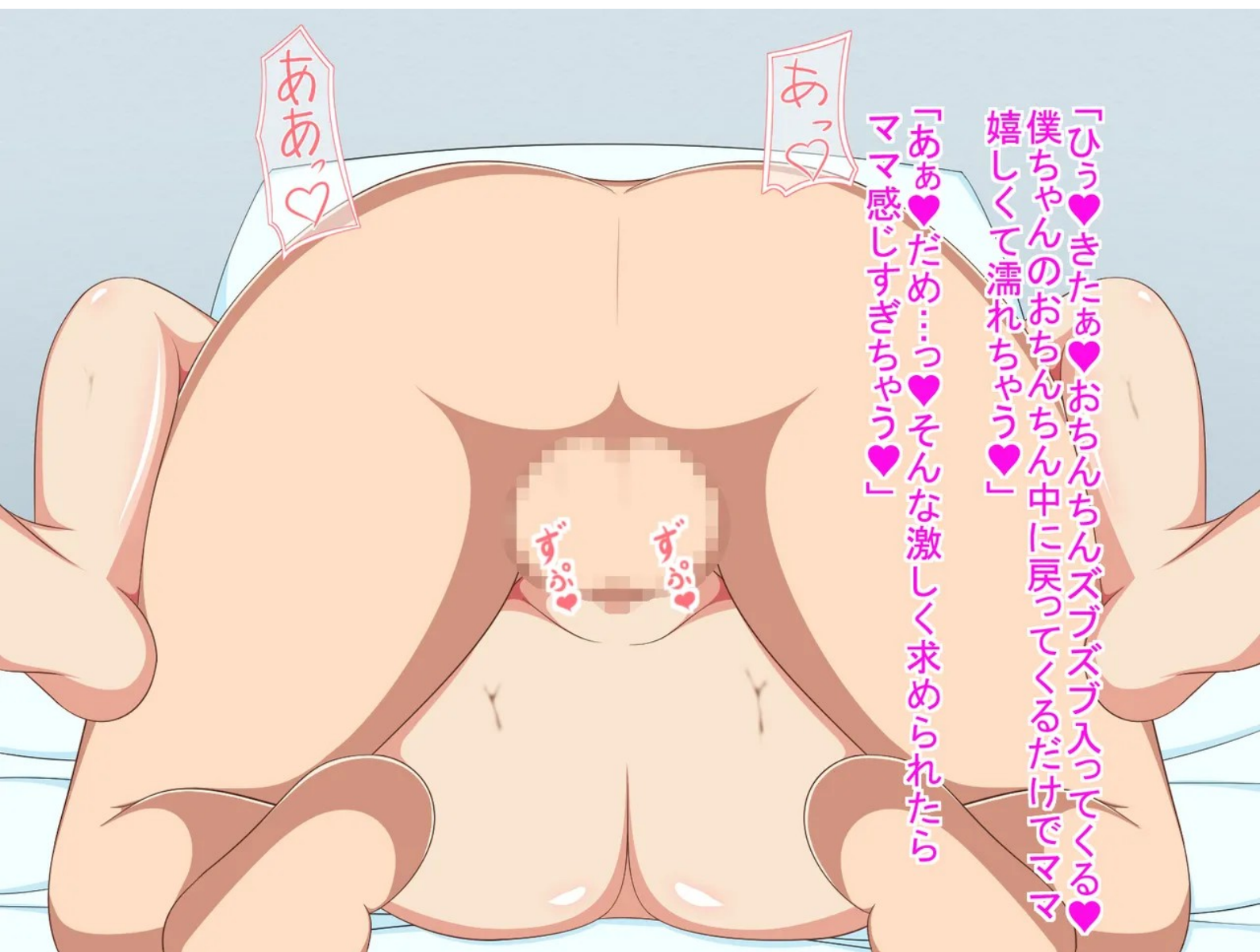
「ああ♡だめ…っ♡そんな激しく求められたら
ママ感じすぎちゃう♡」

あ♡

ああ♡

ずが♡

ずが♡



「っ！そんなこと言っただけでママのおまんこ中、
入れただけで蕩けそうになるくらいすごい気持ち
ちよくて腰止まらないよ！」



「っ！膣内熱くてチンコ溶けちゃいそう！」

「いいっ、いいのお！息子のおちんちん気持ちいいの
お！太くて、熱いおちんちん。ゴツゴツしたのが
中挟って来てるのお♡」

おおま♡

ずが♡

ずが♡



「はあ……♡はあ……♡うあ♡おちんちん中で膨らんできたあ♡中で熱いのがビクンビクンしてる♡」

僕のチンコで喘ぐママの妖艶な顔。

あの優しかったママを自分のイチモツで喘がせてる事に興奮を抑えきれず激しく腰を振る。

ああ♡

ずが♡

ずが♡



「あっ♡ああっ♡奥にコッソコッソって当たってる♡ママの子宮にただいまって入って来たがつてる♡」

「ママっ！ママの一番奥で僕の精液全部出すからねっ！」

「うん♡だしてえ♡ママを僕ちやんで満たして♡」

ああっ♡

ずが♡

ずが♡





おおほっ♡

「おおほっ♡射精止まらない……っ♡ああっ♡中あ入ってえ……っ♡精子がママの中でビチビチ泳いでりゅ♡」

びちゃ♡ しゅ♡ ちゅ♡ ほ♡ ♡



「僕ちゃん舌だして。ママがお口の中気持ちよく
してあげる♥」

はぁ
はぁ♡

僕は言われるがままに舌を出してママに身をゆだねる。口内に侵入してきた舌がクチュクチュと僕の舌を絡め撮る。

ママの舌はまるで別の生き物のように口の中を犯していき思考を徐々に奪われる。

はぁ
はぁ♡





「んちゅっ♡れるっ♡じゅる♡あむっ♡ちゅっ♡
あむっ♡んっ♡ちゅぶっ♡ぢゅるるっ♡♡♡♡♡
…はあ♡…はあ♡もっとお♡」

はあ♡



「んっ……じゅっ♡……じゅっ♡んっ♡……ぢゅるる♡ちゅっ♡」

「うあああ……っ！ママのべろちゅー気持ちいい♡」

はぁ♡はぁ♡

じゅっ♡ちゅっ♡

「あは♡勃起おちんちんお腹に押し付けられ
ちやつてる♡ママのべロちゅーでこんなにして
くれたんだ♡」

はあ
はあ♡



「……うん、気持ちよすぎて、ちんこガチガチに
なっちゃった」

「あは♥すごい元気♥ママの子宮の辺りグリグリ
されちゃってる♥」

はあ
はあ♥



「そんなに早くママとしたいんだ♡…いいよ♡
エッチしようか♡僕ちゃんのおちんちんママの
中で受け入れてあげる♡」

はぁ
はぁ♡





はぁ
はぁ
はぁ

ズ
ブ
ブ...

「はぁ♥はぁ♥やっぱり僕ちゃんがママの中に戻っ
て来てくれるこの瞬間すきい♥」

他人には見せない。僕しか知らないママの発情
しきつた顔と喘ぎ声。

自分だけがそれを知っていると思うと嬉しくて
より一層ママを感じさせられるように円を描く
ように腰を振る。

ジュージューといやらしい音を立てながらチンコが
ママのまんこを抉る度愛液が飛び散る。





はぁ
はぁ♡

「んくっ♡おちんちん中で暴れて…っ♡
あっ♡あっ♡ふかい♡ふかいのお♡おちんちん
一番、深いところまで来てえ♡」

ズ
ブ。
ズ
ブ。



ああっ♡

はあはあ♡

ずっ♡ ずっ♡

「あっ♡息子精子が欲しいって子宮降りて来ちゃったあ♡ああ♡どうしよう、だめなのに排卵しちゃってる♡やあ♡そんなに早く腰振らないでえ♡」



ああっ♡

はあはあ♡

ああ♡

ずっ♡ ずっ♡

「あっ、だめえ！今だされたら赤ちゃんが…っ♡」

「だってママのまんこ気持ちよすぎて止まらないんだもん。いいよね」のまま中に出しちゃっても」



ああ♡

はあはあ♡

ああ♡

びゅるるる♡

ひゅー♡

ひゅー♡



「っ！ママの子宮が吸い付いてっ！っ！搾り取られるっ！」

「……もう、僕ちゃん強引なんだから」

あゝ♡

はあはあ♡

あゝ♡

ひゅん♡

ひゅん♡

ママの大きく開けられた口に容赦なくイチモツ
を突き入れる。ママは苦しそうにするもすぐに僕
のチンコをしゃぶりだした。

上目遣いで僕を見るママの顔を見ていたら我慢
出来ず頭を押さえ付け自分から腰を振ってしまふ。





「んっ♡んっ♡...んっ♡じゅる♡じゅる♡」

「んっ♡んっ♡じゅる♡じゅる♡」

ちゅっ♡

じゅっ♡

んん♡

激しくしすぎてママはより一層苦しそうに
えづくもそれでもどこか恍惚とした顔で僕
のものを受け入れ自分からより深く啜え込む。





「んっ……じゅあっ。じゅるっ♡僕ちゃん、出したい
時はいつでも言ってるね♡ママのお口の中で
精液ドロドロ出っでいいからね♡」

はあ
はあ♡

ママは何かを期待するかなのような目で僕を見上げるてくる。

先程言ったとおり本当にいつでも出して良い
と言うことなだろう。

僕はママの期待に応えるようにさらに動きを早
め喉奥に叩きつけるように射精する。

はぁ
はぁ♡

じゅ
ぽ♡

ちゅ
ぽ♡





びゅるるるるる!!

ひゅるる♡

ひゅー♡

はっ♡...ロテ♡

「んっっ♡ちゅぶ♡ちゅっ、ぢゅるるっ♡んくっ♡
「くっっ♡」

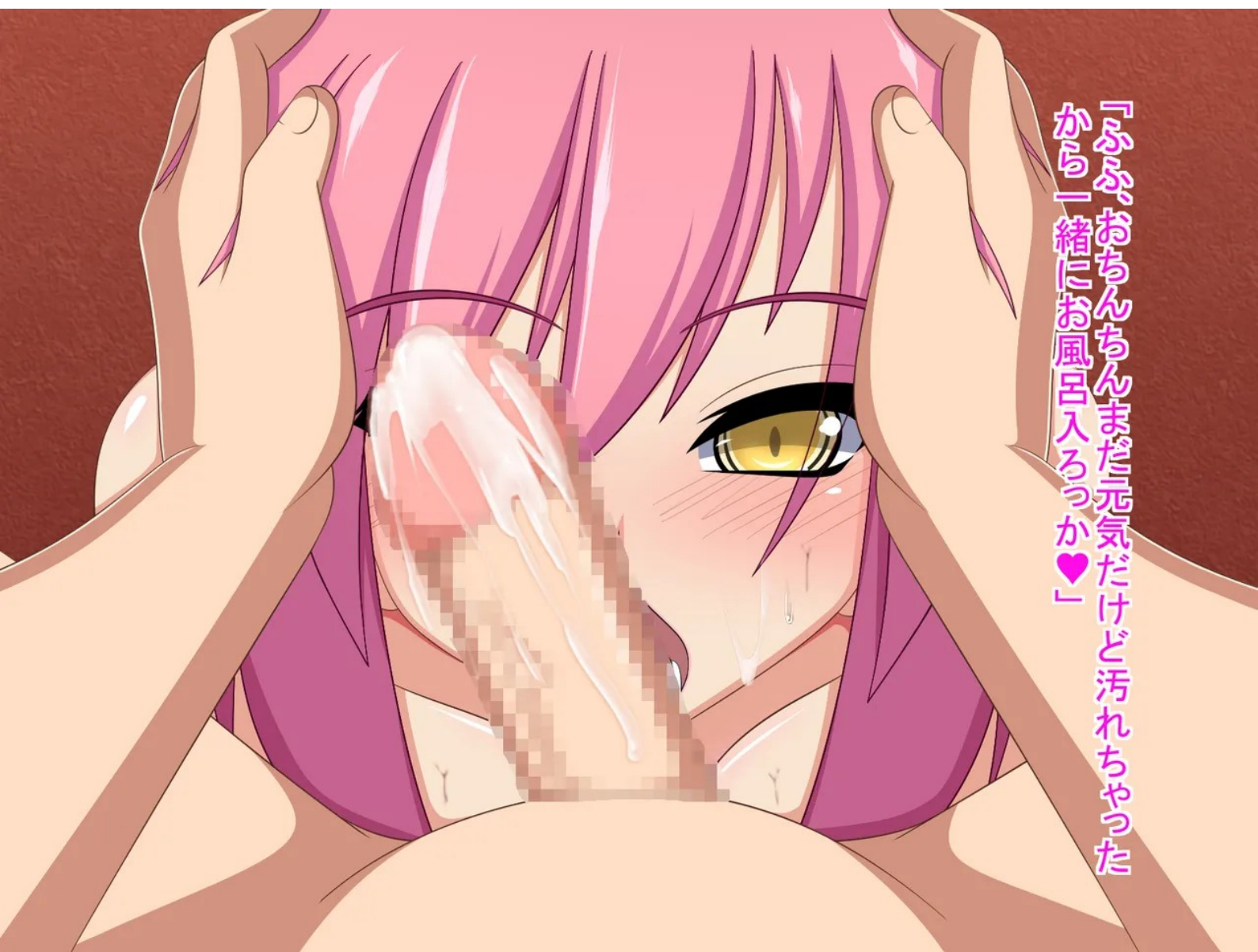
「お口火傷しちゃいそうなぐらいあっつい精液
いっぱい出せたね♡こんなに出されたらママの
お口妊娠しちゃいそう♡」

ドロっ♡
ちゅぽ♡
じゅっ♡

んん♡



「ふふ、おちんちんまだ元気だけど汚れちゃったから一緒に風呂入ろっか♡」



「あっ、僕ちゃんそんな急に♡」

先程のフェラで既に感じていたのか何の抵抗もなく僕のイチモツはママの膣内へと進入する。ピチャ。ピチャと愛液が飛び散るが風呂なので遠慮なく腰を振る。





「あっ♡あっ♡そんな後ろから腰強く振っちゃだめえ……っ♡ひぐっ♡ママ僕ちゃんに犯されてるみたいで感じちゃうの♡」

僕の動きに合わせてるように腰をうねらせ、膣内を抜き差しするたびママの膣肉は嬉しそうに僕のイチモツに絡みつく。



(…っ！相変わらず凄いな。ヒダの一つ一つが絡み付いてチンコ気持ちよすぎっ！)

すぐにでもイってしまいたいのを我慢し少しでもママを気持ち良くさせる為に必死に腰を振る。

だが徐々に迫る快楽の波に限界が近づいてくる。



「ママっ！僕もうっ！」

「いいよ出して♡ワシちゃんみたいに僕ちゃんの
精液でママの中をマーキングしてえ♡」

「いっ…♡」

「いっ…」

「いっ…」

ずっ♡
ずっ♡



びゅるるるっっっ！

「ひぐうっ♡でてるっ♡僕ちゃんだけのお部屋に
精子がドド。ゴドゴド湧って出てる♡」

ニハハ...♡

ニハハ...

ニハハ...

はぁはぁ♡
はぁはぁ♡

はぁはぁ♡

おっ♡





はぁはぁ♡

ぐいぐい...

ぐいぐい...♡

ぐいぐい...

「あ♡おちんちんまた硬くなってきたあ♡」

「僕ちゃんの感じている顔可愛い♡おっぱいでムニムニされて気持ちいいんだあ♡」



「あん♥おっぱいの中でビクビク脈打ってる♥
こんなに熱かったらおっぱい火傷しちゃいそう♪」

はぁ
はぁ
♡

ぐわん...
ぐわん...

ぐわん...♡
ぐわん...

ぐわん...
ぐわん...



手馴れたような胸の動かし方に、もしかしたら僕
以外にも…そう例えば父さんなんかにもしていた
のだろうかと思ひ聞いてしまった。

「……ママ、こういう事父さんにもしてあげたの？」

はあはあ♡

ぐいぐい…

ぐいぐい…♡



顔も知らない父さん。

そんな奴が僕のママのおっぱいを好きにしていた
のかもしれない。

そう考えただけでムカムカとしたものが僕の心に
湧き上がる。

はあはあ♡

ぐいぐい...

ぐいぐい...

ぐいぐい♡



「ん？僕ちゃん以外にしたことなんてないわよ」
「ふふ♡もしかして嫉妬しちゃった？大丈夫よ♡
ママは僕ちゃんだけのものだから♡ほら、気持ち
いいでしょ♡」



「ああっ♥やばい…っ♥おっぱい柔らかくて気持ちいい…っ♥そんなにされたらもう、でちゃう…っ」

はぁはぁ♡

ちゅ。

ちゅ。

ぐいっ…

ぐいっ…

♡…♡…♡



「あは♥おちんちんビクビクして可愛い♥
いっぱい気持ち良くなっておっぱいにビュッビュッ
っでしていいからね♥」

はあ
はあ♥

ぐいっ...

ぐいっ...

ぐいっ...♥



はあはあ♡

ひゅる♡

ひゃー♡

ひゅる♡

「あ、あああ……っ♡」

びゅるるるっ♡



はぁはぁ♡

♡...♡

ジュロ...♡

「こんなにいっぱいビュッビュッしてママのおっぱい
そんなに気持ちよかったんだ♡」

「うぁ...ママママ」

「ふふ♡まだこんなにおっきいね♡それじゃあ、
お風呂あがったらまたママのなかで気持ち良くなろうね♡」

「ひうっ♡ど、どうしたの僕ちゃん。エッチなら
お部屋についてから……っ♡」

僕は何かを言うママを無視しトロトロに濡れそぼ
った膣内に自分のイチモツを押し付け強引に挿入
する。

ずが♡
ずが♡

はぁ
はぁ♡

あっ♡



「だだめよ僕ちゃん。こんなところでエッチして
たら風引いちゃ…っ♡ひぐっ♡いいいつもより激
しい♡」

僕は胸の内に沸いたモヤモヤとしたものをぶつ
けるように乱暴に腰を打ちつける。
ずが♡

ああ♡

はあ♡
はあ♡



「ひぐっ♡す♡い♡奥ぐりぐりってされるのいい♡」

「ママの子宮チンコに吸い付いて離さないよ。
やっぱり僕のチンコが一番好きなんだよね？」

「うん♡好きなの♡僕ちゃんのガチガチおちんちん
だいすき♡」

ずが♡

ずが♡

あひ♡

はあ♡
はあ♡



「そんなに好きならイけっ！アクメしろっ！イキまくれっ！僕のチンコだけで、僕の精液だけでイキまくれっ！」

「だしてえ♡僕ちゃんの精液が欲しいってママの子宮疼いて仕方ないの♡」

ずが♡

はぁはぁ♡



びゅるるるっっっ♡

「おほお♡でてるう♡ママの中で精子泳いでりゅ♡
はあ♡はあ♡し、子宮の中、僕ちゃんの精液で満た
されてしあわせえ♡」

ミロ…ロテ

ひゅるるっ♡

ひゅー♡

おおほ♡



僕は父に関するものが何かないかと探し回った。

最初はただの嫉妬心だった。

僕以外にママを抱いた男。

そのことが頭から離れず、どんな顔をした奴だったのか見てみたくなったのだ。

だが家には僕とママの写真しかない。

父さんや他の親戚が写っているものは何もないのだ。

それが余計に僕の父さんに対する興味を強めた。

ママは父さんのことを聞いても笑って誤魔化すだけで何も教えてくれない。

だがそれでも父さんの事を知りたくなった僕はママの部屋に忍び込んで何か父さんに繋がる物がないかと部屋の中を探し回った。

そして押入れの奥にしまってたあったラベルに日付
だけが書かれたDVDを見つけた。

日付は三十年も前の物だった。

：ママの物だろうか？僕は興味本位にパソコン
で動画を再生する。





● REC

「ああ♥すっ♥私の中でおちんちんがビクン
ビクン暴れてる♥」
「ああ♥奥までゴリゴリって抉じ開けられて
る♥いい♥気持ちいいの♥」

あ♥

ズ
ブ

ズ
ブ

● REC

再生した動画には今と変わらない容姿の母が
何処かで見たことのあるようなおっさんと動物
のように交わり合う姿が映っていた。

ああっ♡



● REC

画面に映っているママは僕にだけ向けていて
くれたトロトロに発情しきった顔を僕以外の
誰かに向けていた

ああっ♡



● REC

「あ、あぁっあ♡後ろから犬みたいにされてるの
に私喜んじやってる♡」

「もっと♡もっと突いてえ♡オマンコ貴方のおちん
ぽにぴったりになるようにしてっ♡おちんぽの形
覚えて戻らなくなるようにしてえ♡」

あひい♡



● REC

っ…出すぞっ…中に出すからなっ!」

「うん♥だしてえ♥なかに♥子宮の奥に欲しい
のお♥」

あひ♥



● REC

びゅるるるるっっっっっ♡♡

「ききたあっ♡精液いっ♡びちやびちやって
オマシコの奥叩いてるっ♡」

ひゅるる♡

ひゅー♡

あひ♡



● REC

……動画の再生は終わった。

だが僕は動画の内容に分けがわからず立ち上
ることが出来なくなっていた。

エロ……♡

ああ♡♡



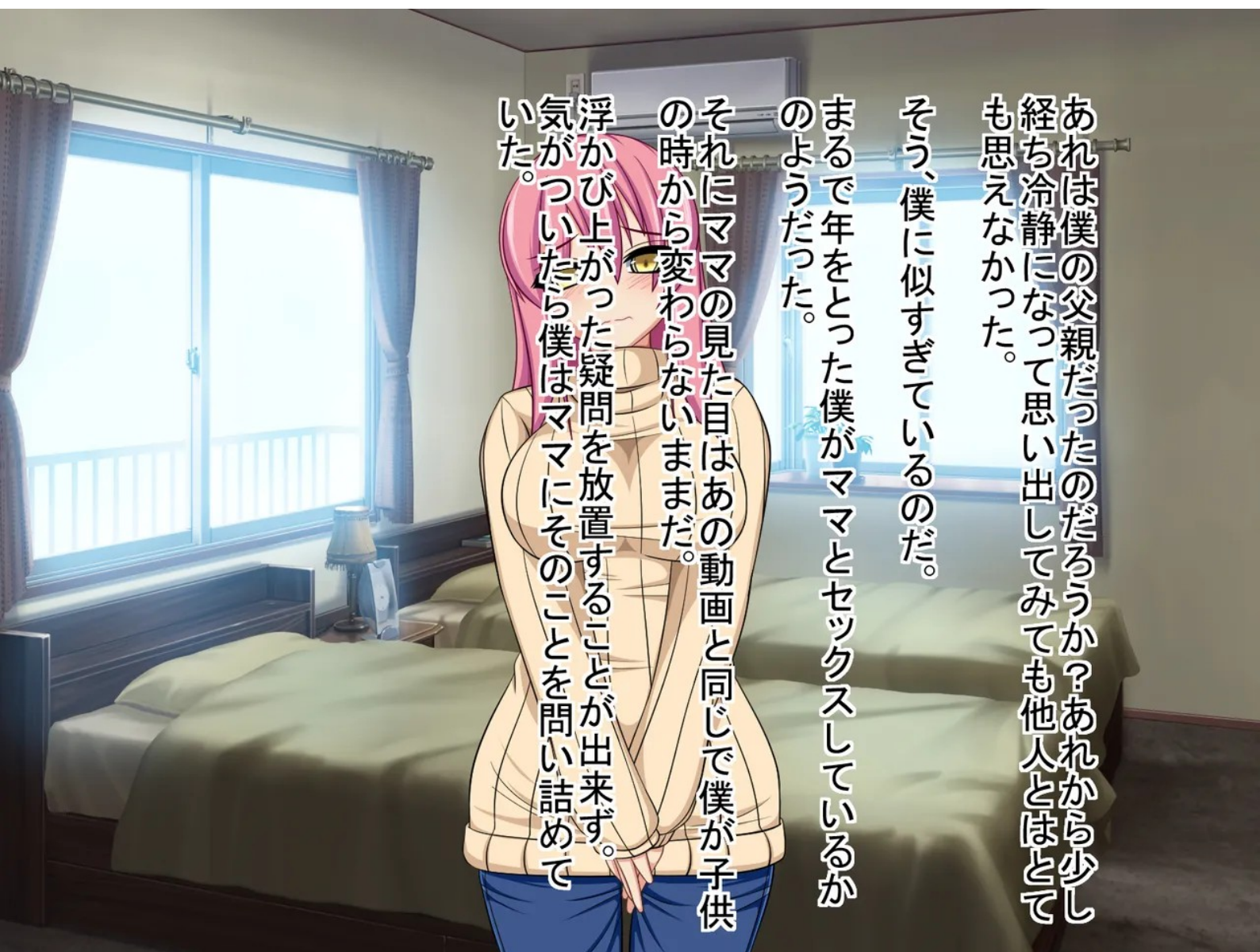
あれは僕の父親だったのだろうか？あれから少し経ち冷静になって思い出してみても他人とはとても思えなかった。

そう、僕に似すぎているのだ。

まるで年をとった僕がママとセックスしているか
のようだった。

それにママの見た目はあの動画と同じで僕が子供の時から変わらないままだ。

浮かび上がった疑問を放置することが出来ず。
気がついたら僕はママにそのことを問い詰めて
いた。



「ママはいったい何なの？あのDVDといい僕
もう分けがわからないよ」

「……そっか、見つけちゃったか」

はぁ
はぁ♡

ぐいっ♡

たぶ
たぶ

ずる♡
ずる♡

ママの姿がブレたかと思うと、まるで漫画や
ゲームに出てくる女悪魔のような姿になる。

呆然とする僕にママは普段とは比べ物になら
ない力でベットに押し倒す。



「ふふ♥あれを見て嫉妬しちゃった？大丈夫だよ
前も言ったでしょ♥ママはずっと昔から僕ちや
んだけのモノなんだから♥」

はあ
はあ♥

ぐいゅ...♥

たぶ
たぶ

ずる♥

ずる♥



何かとてつもなくまずい気がする。

理性が逃げなくてはと警告するのに本能がそれを拒否するかのように体が動いてくれないのだ。

はぁ
はぁ♡

ぐいゅ...♡

たぷ
たぷ

ずる♡
ずる♡



「うーママ…うー」

「大丈夫。何も怖がらなくていいんだよ♡ママはずっと僕ちゃんだけの味方だから♡」

「だからママの中で嫌なこと全部忘れて、また最初からやり直そうね♪」

はぁ
はぁ♡

たぶ
たぶ

ずる
ずる♡



「ま、また？」

「そっだよ。最初の僕ちゃんがママが自分以外を
愛しちゃうのが嫌だっけって言うて嫉妬しちゃったか
ら、僕ちゃんだけをずっと愛してあげられるよう
に産みなおしてあげることにしたの♡」

はぁ
はぁ♡

たぶ
たぶ

ずる♡

ずる♡



「ちよつと怖いかもしれないけど大丈夫だよ♡
ママがずつと僕ちゃんを守ってあげる♡だから
あなたは何も心配しないでママに甘え続けて
いいんだからね♡」

はぁはぁ♡

ぐいっ♡

たぶ
たぶ

「だから全部出しちゃって♡僕ちゃんの全部ママの
中に戻っておいで♡」



「あ、ああ……♡あああ……♡」

射精すると同時に徐々に意識が暗くなる。

まるで自分が溶けていくかのような感覚。
だがそこには恐怖はなかったただひたすらに
安堵感だけがあった。

はぁ
はぁ♡

たぷ
たぷ

びゅん♡
びゅん♡

びゅん♡
びゅん♡



「お帰りなさい……♡」



真つ暗な空間で暖かい何かに包み込まれている。
ただひたすらに安らげる空間。

ここでは何も考える必要もなく、僕の意識は溶けていく。



「あ、動いた♡ママの中に戻ってこれてそんなに
嬉しいんだ♡ふふ、ママが何回でも僕ちゃん産ん
であげるからね♡」

「だからまた、いっぱい、いっぱい、愛し合おうね♪」

















































































